

水田たより 9月号

令和4年9月1日

JA みえきた

桑名地域農業改良普及センター

水稲収穫後のほ場管理

次の作付けに向けてほ場を整えましょう。

■秋の田起こし

収穫後、稲わらをすき込むとケイ酸や窒素を田んぼに補給できます。地温が高いほど土壌微生物が活発に働き、稲わらの分解がスムーズに進みます。分解が不十分だと稲に有害なガス（硫化水素やメタンガス）が発生し生育が阻害されるため収穫後出来るだけ早くの田起こしが望ましいです。稲わらの分解には酸素が必要なので、秋の田起こしは5～10cm程度に浅く耕起します。さらに、稲わらのみで不足する成分は土壌改良材や堆肥で補います。

また、田んぼに残った稲わらが台風などの大雨で流出すると、水路が詰まる原因となります。田起こしはその対策としても有効です。

■秋冬のジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）対策

ジャンボタニシ対策は「秋冬の耕うん+春の薬剤散布+浅水管理」が基本です。収穫後の今は秋冬の耕うんのタイミングです！



ほ場のジャンボタニシ

○秋冬の耕うん

ジャンボタニシは土の中で越冬します。2回の耕うんで越冬貝を減らし、次年度の発生を抑制しましょう！

① 厳寒期前（収穫後～12月）

1回目の耕うんで、大型の貝を破碎します。越冬貝のほとんどが地表から6cmまでに存在するため、車速をゆっくり、ロータリー回転を速くすると効果的に貝を粉砕できます。

② 厳寒期（1～2月）

2回目の耕うんで、土中の貝を寒気にさらします。慣行のトラクターの設定で走行して作土層を確保します。

大豆のカメムシ防除について

桑名管内の水田では、カメムシが早い時期から多く発生していました。一部のカメムシは、稲収穫後に大豆ほ場へ移動し、大豆にも被害を与えます。カメムシが大豆を吸汁すると被害粒となり、減収や等級の低下の原因になります。また、大豆の莢が吸汁されることによって養分の転流が起こらず、莢や葉の中に残り青立ちが発生します。青立ちが起こると、収穫時、莢や葉の汁が大豆につき、汚損粒が発生し等級低下の原因となります。このようなことからカメムシの適期防除は大変重要です。

カメムシ防除は2回薬剤散布を！

1回目：莢伸長期（開花から2～3週間後）

2回目：1回目の防除から2～3週間後



大豆ほ場での
ミナミアオカメムシ
出典：三重県病害虫防除所



被害のない粒

被害粒

大豆害虫ハスモンヨトウについて

ハスモンヨトウは、8月下旬頃から9月終わりまで発生します。病害虫発生予報第5号（三重県病害虫防除所）からは、平年並みと発表されています。発生は9月上旬にピークを迎えますので、注意してほ場を見回ってください。若齢幼虫は、集団で食害し、白変葉を発生させます。また、ハスモンヨトウが成長すると若い莢を食べ、減収の要因にもなります。白変葉を見つけ次第、薬剤散布を行ってください。



ハスモンヨトウの若齢幼虫 ハスモンヨトウによる白変葉

出典：JPPN

麦類作前のほ場管理

桑名管内では、例年11月上旬頃から麦類の播種が行われます。麦類の単収を向上させるためには、ほ場管理が大変重要になります。そこで、以下の取り組みを行ってください。

■ 土壌pHが栽培に重要！！

麦類の適正pHは6.0~6.5ですが、近年pHが著しく低く、生育障害を起こすことが多く見られます。初期生育が悪く、麦類によるほ場の被覆が不十分だと、春先から雑草が多発します。必ず土壌診断を行い、必要な場合は石灰資材などでpHを矯正しましょう。



低pHの小麦ほ場（4月）

■ 明渠を設置しましょう！！

麦類は湿害に弱く、排水対策のため明渠を作る必要があります。条件の良くないほ場では、3~5m間隔で排水溝を設置しましょう。

■ 麦類の雑草防除！！

桑名管内の麦類ほ場において、イタリアンライグラスの発生が見られます。イタリアンライグラスの発生は、麦類播種後から4月上旬まで断続的に続きます。イタリアンライグラスの種子は何年も土に残り、種子の発芽能力が損なわれません。

そこで、耕起や除草剤散布を行い、雑草を減らしましょう。

流れは以下の通りです。



イタリアンライグラスが多く発生したほ場

①播種前耕起

播種2週間前から耕起を行うことによって土中のイタリアンライグラスの種を地表に出し、発生させます。

②茎葉処理剤散布

麦播種前に発生したイタリアンライグラスを、ムラなく除草剤を散布して枯死させます。

播種

③土壌処理剤散布

できるだけ播種当日に薬剤散布してください。また、発生している雑草には効果を示さないため播種前の除草を丁寧に行ってください。

④生育期処理剤散布

生育期に生えてくる雑草の種類によって適切な薬剤を散布してください。